

ぢつと手を見る

今野尚子

標題は彼の有名な石川啄木の歌、

はたらけど

はたらけど猶わが生活くらし 楽にならざり

ぢつと手を見る 『一握の砂』

の一部である。ここで問題にしたいのは「ぢつと」という語の表記である。現在ならばもちろん「じつ」と表記するところであろう。

「じ・ぢ」「ず・づ」は四つがなとよばれ仮名づかいの上ではしばしば問題になる。現在、ほとんどの日本人が「じ・ぢ」「ず・づ」を発音上区別しないが、古い時代にはそれぞれ、まったく別の音韻であった。発音の区別があつた時代の文献で、「じつと」はどう表記されてゐたであろうか。語の性格上、「じつと」はあまり古い文献には見出しにくい、キリシタン

資料である『日葡辞書』には次のようにある。

Ito シツト(じつと) 副詞。締めつける

さま、または、手の中に物を握りしめる

さま、など。Teni jito niguru. (手にじ

つと握る) 力を入れて、物を手の中に握

りしめる。Ito ximur. (じつと締むる)

力をこめて締めつける。

『邦訳日葡辞書』

『日葡辞書』では「H (J)」と「G」を表

記しわけ、前者が「じ」、後者が「ぢ」にあ

る。これをそのまま発音に結びつけるのには

慎重でなければならぬが、室町時代、「じつ

と」は「じ」と発音していた可能性が高い。

抄物からも「じつと」の例を拾うことがで

きる。

控ハカケテウトスル處ヲシツト引ヘタラ

云々 『毛詩抄』四24ウ6

不得手ナコトニハ必ス忙クフワツクモノ

ソ物ニ得手ハシツトシツマルモノソ

『四河入海』十七ノ345ウ4

この時代までの「じつと」は「じ」で発音

され、それが表記にも反映されているのであ

る。江戸時代に入っても前期の近松門左衛門

の次の例は、この流れを受け継いでいると考

えられる。

身もひやくと。心よき。はだをしめさ

せ。しめてもらハッこちからも。じつと

しめく。それもしめりて。さみだれの。

『ひぢりめん卯月紅葉』

鞍の前輪に打掛くる其の手を取つてじつ

と締め。『鉗権三重帷子』

『卯月紅葉』は宝永年間、『鉗権三』は享保年間の成立である。この少し前、元禄年間に四つがなだけを論じた書が出版されており、京都ではすでに発音の区別が失なわれていたとされている。

江戸後期になるとそれを反映し、『じつと』の表記にも混乱がおこってくる。寛政年間に出版された『古今集遠鏡』（本居宣長）と『詞葉新雅』（富士谷御杖）とを見る。用例は各四例であるが、これが「チ」と「ジ」とにわかれているのである。

『古今集遠鏡』

郭公ガ（中略）チツト鳴テキル

（二5オ3）

コチラニチツトトマツテ居ルヤウニ

（四2オ3）

アノ月ハ（中略）アノヤウニチツトユ

ルリトシテアルニ（四33オ7）

オレハ（中略）床ノマン中ニサチツト起

テ居ル（六43オ10）

『詞葉新雅』

ジツトシテキル（89オ6下）

ジツトシテ（91オ1下）

ジツトシテハキラレマイ なほあらじ

伊物ノなほやハあるハジツトシテ
キラレウカヤノ心ナリ

（92ウ2下）

宣長も御杖もともに国学者であるにもかかわらず、このようにわかれてしまうこと、しかも宣長が古い時代とは異なる「チ」を用いていることは興味深い。

そして明治に入ると「ぢつと」と表記する例が圧倒的に多くなる。

然し切角主人が熱心に筆を執つてゐるのを動いては氣の毒だと思ふて、ぢつと辛棒して居つた。『吾輩は猫である』（漱石）然し減多に聲を立てると危険であるから昵と泳へて居る。 同右

（前略）四角な緒ら顔の爺いさんである。瀬田の様子をぢつと見てゐたが、……

『大塩平八郎』（鷗外）

安寿はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。『山椒大夫』（鷗外）

恠う凝然として居ると遠くの方へ滅入つて畢ふやうな心持がして……『土』（長塚節）

白い鶴は（中略）さうして青い煙の中に凝然として目を閉ぢて居る。 同右

ぢつとして寝ていらつしやいと子供にでもいふがごとくに

医者のおふ日かな。『悲しき玩具』（啄木）

漱石、鷗外といった時代を代表する作家が「ぢつと」を用いている。特に、鷗外は仮名のづかいに意を用い、正確を期したといわれている。その鷗外でさえ「ぢつと」と表記したのは、この語が擬態語であるという事情によるものであろう。擬態語は感覚に根ざすので、語源や語構成を手がかりにして仮名づかいを考えることができない。しかも、仮名づかいの拠りどころとなる古い文献には見出すことの困難な語である。その結果、江戸後期から明治時代にかけて、もともとの表記とは逆の「ぢつと」がいわば「時代の仮名づかい」として勢力を持ったと考えられる。ただし「じつと」がまったく行われなかったわけではなく、『浮雲』第一篇（二葉亭四迷）では「ぢつと」四例に対して「ジツト」も一例見られる。しかし「ぢつと」の勢力の大きさは比ぶべくもないであろう。なぜ「じつと」ではなく「ぢつと」が選ばれたのか？——漱石や鷗外に聞くこともできないが、この時代の多くの人々に共通して「ぢつと」表記がもたらす擬態語としての効果があったのではないか。現代のわれわれも何となくそれを感じることができるよう思う。